

大東文化大学 東洋研究所所報

2009.12 No.52

目次

志賀島で抱田地の意味を問う 大谷光男	1
公開講座	3
しづ市民大学合同講演会 山田 準	4
第3回東アジア三大学国際学術会議参加報告 小林春樹	5
〔海外出張報告〕 イェーテボリ大学での学術活動報告 福田俊昭	5

〔国際交流〕 吉林師範大学東亜研究所所長来訪 吉林師範大学東亜研究所訪問記 山田 準	6
東洋研究所刊行物	7
新刊案内	8

しかのしま かかえでんち

志賀島で抱田地の意味を問う

大谷 光男

有名な「漢委奴国王」金印が出土した志賀島は、博多湾の入口に浮ぶ小島で、現在は砂嘴による「海の中道」が陸繋化された面積5.87km²、一周する道路は9.5kmの風光明媚な玄界灘を眺望して走るマラソン・コースとして最適の地でもある。行政区画は、島全体が福岡市東区に所属している。博多港から快速艇で30分、バスでは博多駅から一時間余と、通勤圏に入っており、人口も増えている。産業は漁業と農業、果樹・苺の生産が著しい。

今回、私が招かれたのは（10月17日）、昨年10月に「NPO法人志賀島歴史研究会」が認可されたことを記念に、「金印と出合って55年」というテーマで、金印発掘口上書といわれる「志賀島村百姓甚兵衛の口上書」と、金印の五文字（陰刻）の読み方の二問に答えるという手続になっていたが、後者の「読み方」は一時間余の持ち時間では及ばず、後日に改めて述べることになった。

志賀島村は南の博多に面して市営の港があり、博多湾に面し中央部の隣の弘も同様に、漁港がある。島の北側は岩山で、かつ玄界灘であり、船の

発着には適さない。農地は南の福岡湾にむいて段々畠、水田があり、例の金印は弘村に近い改正道路（バス通り）の山寄りの階段状の地形から出土したと口上書に伝えている。田地に注がれる水流も小さく、今日は一帯に「叶の崎」の道路と化しているの、利用者はなく、道路に小流が落ち込んでいるという状態で、飲料水にもなっていない。弘村から西北に道をとると、農村地帯の勝馬村に至る。平地の水田地帯であり、苺の生産地として知られている。現在、村名は大字に改称。

さて、天明4年（1784）2月、当時の志賀島村庄



屋は、隣村の勝馬村庄屋である長谷川武蔵が兼務していた。甚兵衛の口上書は武蔵が筆記、料紙は福岡県下の八女紙で、楮による半紙である。残念ながら今日、甚兵衛の口上書の行方は不明であるが、筆者は昭和30年（1955）春、黒田家の家令であった中島利一郎氏から借用した。武蔵の筆蹟は優れており、漢籍にも造詣が深く、『野文童訓』を著わしたという（蒲地家の書幅）。

口上書の表題は「那珂郡志賀嶋村百姓甚兵衛申上ル口上之覚」とある。そして問題はその冒頭に、

一、私抱田地叶の崎と申所田境之中溝……とあって、まず第一に、甚兵衛は志賀島村の本百姓であるが、住居は何処か。金印発掘に協力した秀治は志賀島村小路町とある（阿曇氏蔵『万曆家内年鑑』天明四年二月二十三日条）。第二は、金印の発掘地「叶の崎」は、田地の字名ではなく、島の方角を記したもので、庄屋の武蔵は金印出土地を確認していないことがわかる。さらに問題は「抱田地」とは如何なる田地か。

小宮山昌世の『地方問答書』は、享保6年（1721）以後の著作といわれ、かつて幕府の代官職にあって調査の上、執筆したものである。志賀島村の阿曇家が現在所蔵している、寛政2年（1790）5月の『那珂郡志賀嶋村田畠名寄帳』の中冊（村方控）には、「古田 甚兵衛」の個所に「カツマ 藤十作」を抹消して右側に「ヒロ 甚平作」とし、かつ、右側に「孫次」とし、また抹消して右側に「甚兵衛」とある。しかし水田の字名に「長うら」「はしり落」「後別当」が記されて、金印発光之处の記念碑が建っている字古戸の字名はない。かつて字古戸には一反一畝三步の田地が存在していた。おそらく、同名寄帳の上冊が発見されると、金印の出土地点が確認される可能性が高い。

ところで、甚兵衛の口上書の抱田地について、右の『地方問答書』によると、「抱田地、抱屋敷の名目有、其百姓にあらずして、外より所持するをいう」とある。また大石久敬が寛政6年（1794）

に著わした『地方凡例録』にも、内容は同じである。板橋皓世氏（山口県歴史民俗資料館学芸員）に依頼した福岡県福岡町（現・福津市）の中村（清）文書の抱田地記載文書をもみても、水田の等級とは関係がない。岡本顕実氏（九州産業大学講師）が撮影した九州文化史所蔵ZB史料・秋月黒田家文書をもみても、実は抱田地の史料には他村との関係が少ないのではあるまいか。幕末の茨城県潮来市旧牛堀村須田本家文書を研究した、明治大学門前博之教授によると（明治大学人文科学研究紀要第59冊）、

抱屋敷は村内上層が多く所持すること、また、他村の所持者も存在することなどから、抱屋敷とは買得あるいは抵当として集積された屋敷なのではないか、と推測される。（牛堀村は旧水戸藩）

と、『地方凡例録』を念頭に置いて述べている。抱屋敷の所有者は他村の本百姓がむしろ少ないと報告している。九州地区の抱田地についても考えさせられるが、若い研究者諸君の努力に期待したい。

□筆者紹介□



- ・元東洋研究所研究員
- ・二松学舎大学名誉教授

◇研究所刊行物◇

- ・『東アジアの古代史を探る』
- ・『年代学（天文・暦・陰陽道）の研究』
- ・機関誌「東洋研究」「天皇即位の冕服に関わる文献について」他10本

なお、2009年度秋の叙勲におきまして「瑞宝中綬章」を受章されました。

☆筆者は2009年10月17日（土）に福岡市志賀島小学校講堂で開催された、NPO法人志賀島歴史研究会主催の第3回志賀島歴史シンポジウムに招かれ、「金印と出合って55年」と題し、基調講演をされております。

公開講座 「アジアの民族と文化」

2009年度（第25回）の東洋研究所公開講座は、「アジアの民族と文化」を統一テーマに大東文化会館を会場として、下記の通り開催された。受講者総数は延べ139名（一般119名、教職員20名）で、講座案内に掲載した各講座の概要は以下のとおりである。

なお昨年に引き続き、長年ご出席いただいた方6名に対して記念品を添えて表彰した。

◇第1回 11月12日（木）13：00～15：00 大東文化会館1階ホール

テーマ：弘法大師空海の生涯と思想

講師：松本照敬（東洋研究所教授）



弘法大師空海は、「お大師さま」の呼称で親しまれている。大師号と空海とが深く結びついているのは、全国各地の井戸や温泉にまつわる大師伝説や四国八十八箇所の巡礼などによって、弘法大師の名が広く流布しているためであろう。しかしながら、名が知られているほどには、空海の歴史の実像や思想は知られていない。本講座では空海の足跡を尋ね、思想内容についてできるだけ平易に解説してみたい。

◇第2回 11月19日（木）13：00～15：00 大東文化会館3階-K0302 研修室

テーマ：フランス革命期における遠隔地通信—腕木信号機網の交信記録を読み解く—

講師：瓜生洋一（東洋研究所兼担研究員，法学部政治学科教授）



18世紀末から19世紀にかけて、通信の革命が起こった。それまで遠隔地通信は、馬、馬車などの手段でおこなわれた。フランス革命期、眼視（望遠鏡）で情報を読み取り、腕木によって次々と伝達するようになった。また、19世紀中頃に、電信機による情報伝達がおこなわれるようになった。本報告では、1794年10月から1795年11月にかけて、フランスのパリとリールを結ぶ腕木信号機の交信記録に記載されたことを解説して、何が伝達されたかを紹介する。

◇第3回 11月26日(木) 13:00～15:00 大東文化会館3階-K0302 研修室

テーマ：中国南部の少数民族の文化について

講師：加治明（東洋研究所特別兼任研究員、大東文化大学名誉教授）



我が国の隣国である中国は、いうまでもなくその国土は広大であり（日本の約25倍）、人口もきわめて多い。歴史的にみると、我が国は早くから漢字をはじめ、中国の学問・思想・芸術・宗教・政治制度などさまざまな文化や制度を受容し、あ

るいはその影響を受けてきた。13億人ともいわれる中国の人口の大部分は漢民族であるが、チベット族やモンゴル族・ウイグル族など少数民族（非漢民族）も55種を数え、彼らはおもに辺境地域に居住する。中国南部（長江ないし揚子江以南の地域）は現在、多数の漢民族が居住するが、少数民族も各地に分布する。南中国は元来、非漢民族の地域であり、漢民族は北中国（黄河中・下流域）より歴史を通じて南下移住してきたものである。南中国は温暖多雨の気候に属し、早くから水稲耕作が発達してきたが、その水稲耕作と少数民族との関係も重要な問題と考えられる。今回は多種の少数民族のうち、いくつかを選び、その文化を検討してみたい。

しづ市民大学合同講演会：「日蘭交流開始の背景」

東洋研究所教授 山田 準

2009.8.22（土）13:00～15:00 於：佐倉市志津公民館

1600年大分県臼杵にオランダ船「リーフデ号」が到着したことから、日蘭交流が開始された。2000年には、両国において交流400年を祝うイベントが多数開催された。本年は1609年にオランダの国書を携えたオランダ船が2隻到着し通商を求め、平戸に商館が建てられたことから日蘭通商400年として、やはり両国でイベントが開催されたが、2000年ほどの規模ではなかった。

しづ市民大学が開催される千葉県佐倉市は、近世田沼時代から蘭学が盛んになり、蘭学に関する研究などを通して、日本及び佐倉市とオランダとの文化交流を推進し、両国民の友好親善関係の増進に寄与する目的で、1987年には日蘭協会が設立されている。また、佐倉市制40周年の1994年には佐倉ふるさと広場に本格的オランダ風車を建設し、日本に初めて来航したオランダ船「リーフデ号」にちなんで、「リーフデ」と名付けられた。このように日蘭関係の深い佐倉市の教育委員会からの依



頼を受け休憩を含め2時間程の講演を行った。

講演内容は、日蘭交流のきっかけとなった「リーフデ号」を中心に、リーフデ号出航当時のオランダの時代的背景、その目的がスペインに一泡吹かせることと、第2の目的地として日本を目指していたこと、なぜオランダ船なのにイギリス人水先案内人三浦按針ことウィリアム・アダムスが乗船していたかについて持論を展開した。



発表中の筆者（左）

第3回東アジア三大学国際学術会議が2009年9月14日から18日にわたって韓国の成均館大学校儒教文化研究所の主宰によって開催された。テーマは「東アジアにおける自我の問題」であった。

中国・山東大学文史哲研究院における、「東アジア儒教思想の現代的意義」を主題とした第一回会議（2007年）、本学における「東アジアにおける家族」をめぐる第二回会議（2008年）に続く三年目の会議であるとともに、筆者を含めて、すべての会議に関わった参加者も多かったために、旧交をもあため得る有意義な会議になった。

「裴勇俊」（ペヨンジュン）氏が在学していたことによって近年とみに有名になった同大学校は、朝鮮（李朝）時代の初期の1398年に、同王朝の建国者・太祖（李成桂）によって設置された国学（国子館）の流れを汲む名門校であるとともに、本会議を主催して下さった儒教文化研究所や、儒学

関連の学科・大学院、さらには孔子廟を擁することでも知られた特色ある大学である。

学術会議自体は、同校の「六百周年記念館」において9月15日午前10時からの開会式、それに続く、渡部茂大東文化大学学長・傅永軍山東大学文史哲研究院院長・崔一凡成均館大学校儒教文化研究所所長による基調講演を以て開始された（因みに、渡部学長のテーマは「真の個人主義と自生的秩序」であった）。その後昼餐会をはさんで、13時から「東アジア思想史の展開と自我」という総合テーマのもとに七題の発表が行われ、本学からは吉田篤志中国学科准教授による「中国古代における〈我〉の自覚」という研究発表が為されたのち、18時から30分間の総合討論を経て第一日目の会議は終了した。

二日目に当たる翌16日の会議は午前9時30分から、前日と同じ六百周年記念館において、社会科学に関わる研究を中心とした第一部会、人文科学を中心とした第二部会に分かれて開催された。ちなみに本学からの参加者は、第一部会において麻生利勝法科大学院教授が（演題は「東アジアにおける個の問題」）、また第二部会では、藏中しのぶ日本語学科教授（「鑑真伝『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』から『唐大和上東征伝』へ」）、山口敦史日本文学学科准教授（「古代日本文学における個人の救済についての一考察」）、寺村政男日本語学科教授（「李朝漢語テキスト『訓世評話』：東アジアの視点から」）、そして筆者（「司馬遷における『史記』述作の個人的動機について」）がそれぞれ発表を行なった。

〔海外出張報告〕 イェーテボリ大学での学術活動報告

東洋研究所教授 福田 俊昭

20年振りにスウェーデンの地を踏むことになった。今回の目的は大東文化大学とスウェーデン大学共催の国際講演会とワークショップを開催し、スウェーデン国内に向けて大東文化大学が大学院生を募集する情報宣伝を行うことにあった。8月13日～8月16日までスウェーデンのイェーテボリに滞在した。イェーテボリはスウェーデン南西部、カテガット海峡に面する商工業都市で、造船自動車工業が盛んなスウェーデン第2の都市である。

イェーテボリ大学は日本の金沢美術工芸大学、北海道大学、三重大学、高知大学等と学術交流協定を締結している。この大学には、20年前ストックホルム大学で研修をしたときにお世話になったトゥンマン武井典子先生が勤務している。

この大学で大東文化大学とイェーテボリ大学共催の国際ワークショップが開催され、「杜甫の詩にみえる鷗」と題して講演をし、翌日には両校共催

の国際講演会「スウェーデンと日本、日本学研究の可能性」が開催され、午前の部で「中国文学研究と日本文学」と題して研究発表をおこなった。ワークショップ終了後、イエーテボリ大学の日本語研究者の親睦会に参加し、大東文化大学及び外国語学研究科日本語文化専攻の情報と大学院生の募集を宣伝した。その成果が即座にあらわれ、イエーテボリ大学日本語専攻の康子マドセン教授から院生交換の申し出があった。具体的には帰国後内容を詰めることで合意し、イエーテボリを後にした。



前列左よりトゥンマン武井典子先生、
康子マドセン先生。後列左が筆者

〔国際交流〕 吉林師範大学東亜研究所所長来訪
吉林師範大学東亜研究所訪問記

東洋研究所所長 山田 準

去る7月14日（木）現在国際交流協定締結の準備を進めている吉林師範大学の東亜研究所所長渡邊與五郎教授が来訪された。研究所内見学の後、所員と昼食会、長春や吉林省、大学のある四平市などについてお話を伺うことが出来た。本学の大学院生の吉林師範大学への国費留学が決まったこともあって、研究所間の交流協定締結後は、大学間の交流協定に向けて努力したいとのことであった。



挨拶される渡邊東亜研究所所長

この渡邊與五郎教授の来所を受けて、9月に1週間の予定で吉林師範大学を訪問する機会を得た。吉林師範大学は吉林省の省都、長春市から南に車で1時間半程の四平市にある総合大学である。本学の大学院生が、9月から中国国費留学をすることもあり、留学生寮に宿泊させて頂いた。ちょうど新型インフルエンザの流行が懸念され、会館に到

着するなり体温を計り健康チェックを受けて、部屋に案内された。2007年にできた寮のコンディションは非常に良く、部屋の中には簡単なキッチンが付いており、部屋は二人部屋で、ベッドが2台、勉強机が2つ、洋服ダンスが設置されており、スペース的にもかなり余裕があった。各部屋にはトイレ、洗面台、シャワールームが付いており、日本のビジネスホテルより快適な寮生活ができるようになっている。ルームキーはカード式で、カードを差し込んでドアを開け、カードを壁に差し込むことで、電気が灯るようになっている。ただ、トイレは水洗になっているが、使用したペーパーは横のゴミ箱に捨てなくてはならないのは近代的な設備で最も遅れているところであった。

大学構内には学生全員の寮が完備し、先生方の家も準備されている。大学構内を見学するのに半日かかりであった。近代的な大学本部を囲むように、各学部の建物や施設が建てられている。東亜研究所は大学本部から奥まった静かな所にあり、研究員の研究室は大東の研究室の3倍はあり、客員研究員の部屋も準備されていた。図書館は大学本部の横にあり、朝早くから学生であふれていた。構内には有料の公衆浴場もあり、学生食堂では宗教や民族に配慮した様々な料理が作られてプリペイドカードで自由に食べることができるようになっていた。研究生活の環境は抜群で、大学構内から一歩外に出ると、学生向けの食堂やマーケットがあり、活気ある街を散策することができる。

今後両研究所の交流が発展することを期待している。

【機関誌】

- 東洋研究 第172号 (2009年7月25日発行)
大谷 光男…天皇即位の冕服に関わる文献について
小林 春樹…「漢書」「元后伝」・「王莽伝」の構成と述作目的
福田 俊昭…「朝野僉載」に見える識應説話 (後編)
岡崎 邦彦…1937年西北善後処理問題 (上) —張学良拘束による西安と南京の対立—
松本 照敬…ラーマースジャ思想の研究 (6)
- 東洋研究 第173号 (2009年11月25日発行)
藏中しのぶ…三つの道瑠伝—「鑑真伝三部作」における隆尊伝・道瑠伝—
安保 博史…芭蕉句「世にふるもさらに宗祇のやどり哉」考—芭蕉説話化の一過程—
兵頭 徹…海軍省調査課と囑託の役割 (五) —各種懇談会・研究会の活動—
大杉 由香…日本におけるNPOの現況と問題点—日米比較を通して見えてきた課題—
- 東洋研究 第174号 (2009年12月25日発行)
相田 満…六国史のキツネ—その祥瑞と怪異をめぐって—
渡邊 義浩…西晋「儒教国家」の限界と八王の乱
新里 孝一…ケアとく注意力—S・ヴェイユをめぐって—
柴田 善雅…第1次大戦期日本政府の戦争海上保険介入
- 東洋研究 第175号 (2010年1月25日発行予定)
山下 克明…陰陽道の特徴と関係典籍
濱 久雄…太宰春台の易学思想
小坂 眞二…十一世紀代の怪異六壬式占文について (下)
田辺 清…ルネサンス絵画と中国陶磁器 (II)

【刊行図書】

- 昭和社会経済史料集成 第36巻 昭和研究会資料 (6) (2009年8月31日発行)
A5判 514頁
東洋研究所教授 兵頭徹、大東文化大学名誉教授 大久保達正・永田元也 編集
- 藝文類聚 (巻83) 訓讀付索引 (2010年3月25日発行予定)
B5判 東洋研究所教授 福田俊昭 (代表) 他6名共著
- 茶譜 巻2 注釈 (2010年3月25日発行予定)
B5判 東洋研究所兼担研究員 藏中しのぶ、東洋研究所教授 福田俊昭 他著



◇研究員消息◇

兵頭 徹 (東洋研究所教授)

下記の高等教育セミナーで講師として発表。

1. 研修会名 大学アーカイブズと自校教育の展開
—創設・試練・再興の歴史パワー／教養教育としての大学史—
2. 日 時 2009年9月3日 (木) 11:10～12:30
3. テーマ [大東文化大学] 大東アーカイブズの運営と自校史教育への支援
—創設86年、百年史編纂準備活動の中で—
4. 会 場 日本教育会館 会議室 (東京・神保町)

新刊案内



『昭和社會經濟史料集成』 第36卷 昭和研究会資料(6)
兵頭 徹・大久保達正・永田元也 編集
2009年8月31日発行/A5判 514頁/頒価¥7,000(税別)

昭和研究会は、後藤隆之助(1888～1984)主宰のもと昭和8年に発足した民間国策研究機関で、近衛文麿(1891～1945)のブレーン・トラスト集団である。政治、外交、経済、社会、教育、文化等の分野に当時一流の有識者が数多くの政策研究案を立案した。

《既刊》第1～30巻 海軍省資料(1)～(30)
第31～35巻 昭和研究会資料(1)～(5)



『藝文類聚』(巻82) 訓読付索引
大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 福田俊昭
2009年3月25日発行/B5判 143頁/頒価¥6,000(税別)

『藝文類聚』は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。本書はその『藝文類聚』を巻ごとに訓読分を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に重要語彙索引を掲載したものである。

巻82には「草部下」=芙蓉 菱 蒲 萍 苔 菰 荻 蓍 茗 茅 蓬 艾 藤 菜蔬
葵 薺 葱 蓼を収録

《既刊》巻1～巻16, 巻80, 巻81



『茶譜』巻1 注釈
藏中しのぶ・福田俊昭・相田満・安保博史・矢ヶ崎善太郎・渡辺信和共著
2009年3月25日発行/B5判 230頁/頒価¥8,000(税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がさざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

☆巻2 2010年3月刊行予定

☆この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください

刊行図書取扱店

■巖南堂書店

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-13-1
TEL (03) 3262-7234

■池上書店(大東文化大学板橋校舎内)

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1
TEL (03) 3932-7567

■汲古書院

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-5-4
TEL (03) 3265-9764

■進明堂(大東文化大学東松山校舎内)

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL (0493) 34-4430

大東文化大学東洋研究所所報 No.52

2009年12月25日発行

編集・発行 大東文化大学東洋研究所

〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-19-10

TEL(03)5399-7351 FAX(03)5399-8756

E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

URL <http://www2.daito.ac.jp>

印刷 (株)東京技術協会